

## ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル ワルター・ラーテナウの「特性」を批評する二人

長谷川 淳 基\*

Robert Musil und Alfred Kerr

Zu ihren Kritiken über die „Eigenschaften“ Walther Rathenaus

Junki HASEGAWA

### I 始めに

ドイツ・ワイマル時代を語るとき、ワルター・ラーテナウは欠くことのできない人物である。第一次大戦に敗北したドイツの賠償処理を担った外務大臣は、同時にドイツ実業界に大きな勢力を有する人物であった。そして1922年に暗殺されたラーテナウは、早い時期の、あるいは早すぎる時期のナチの犠牲者としても歴史に名を残している。

このラーテナウは、またムージルの『特性のない男』の中の「特性を持つ男」のモデルともなった。それゆえラーテナウはドイツ文学の歴史に名を刻んだ人物でもある。ムージルはすでに第一次大戦前の時期にラーテナウと知り合い、同じ時期に彼の著書について批評を発表した。その批評にはムージルがその後の生涯をかけて追及した主題が扱われている。その主題の設定、あるいはその批評の論理の組み立てには先行するひな形があった。アルフレート・ケルのラーテナウ批評がそれである。

ケルは1912年、自らの雑誌「パーン」にラーテナウについて評論を発表した。この文章を知る者は、ラーテナウではなく、この文章こそがムージルの「特性を持つ男」のモデルであったのでは、との思いを抱くに違いない。

以下本論はムージルとケルの批評によって描かれた「特性を持つ男」ラーテナウについて考察する。

### II ケルの「ラーテナウ」批評

1912年9月19日付「パーン」にケルは「ワルター・ラーテナウ」<sup>1)</sup>と題する批評を発表した。ケルはこの批評により、この年に出版されたラーテナウの2冊目の著作『時代の批評に寄せて』<sup>2)</sup>の分析を通して彼を厳しく批判した。全体は9つの章から成る。一章ずつ読むことにしよう。

---

\*人間関係学科 教授

ワルター・ラーテナウ  
アルフレート・ケル記す

I.

幸福ではない人間。せいぜいのところ表面では満足し、内面は満足していない人間。ときに思い上がる人間、ときにうぬぼれる—単純さ。しかしこれが彼の本質を形成してはいない。最も遠い道を通して、カーブを通して、彼の理想とする簡素へたどり着く人間。運命に甘やかされた人間。しかし良いタイプの人間なので、この甘やかしに立ち止まらない。捜し求める気持ちが強すぎて「時よ、止まれ。おまえは美しい」と言えない。こう言えるほど気持ちが高まっていない。二重の人間。すなわち、秀でていると思われたいと欲求から逃れられない。がしかし、自意識の欠如から変なことに手を出してしまう人間。総じて、現代の勢力への非常な気配り。この国の、無価値だが、しかし勢力を有する存在への気配り。そして決意する、この勢力に価値を付してやろう……。しかし彼はこの地であっても（もしも、このプロシア人の国家が彼を何らかの地位に任命するということがなければ）より質素な存在へ変わる能力を持っているように見える。最終の真実はいつも放免された後でなければ分らない。

この最初の章でケルはラーテナウという人物の複雑な二面性を描いている。そして社会的勢力におもねる彼の態度、そして彼がその生き方を反省し克服しうる可能性をケルは指摘している。

II.

彼はシステムを発見したと思っている。おそらくは二つの古いシステムの仕立て直し。シラーは言う。こちらは情感、あちらは素朴。ハイネは言う。こちらはナザレ人、あちらはギリシャ人。こうしたものから彼は作り出す。こちらは恐れを知り目的を持つ人間、あちらは恐れを知らず目的のない人間…。無目的には肯定できることがあるのだろうか？ 無目的とは、考えることからあるいは価値を有するものから、そして今日的であることから距離を置くことではないか。野獣状態から脱け出ること、役立つことのすべてから、そして内的弛緩からの覚醒に役立つすべてから距離を置くこと。オペラ概念。演劇、ジークフリート。

株取引に関わる人々が目的という意味で使う隠語はタハレス tachles。この語に相当する正しいドイツ語として、彼は相互に関係のない二語、目的と恐れ、を用いる。私はラーテナウの人間認識の聡明さを認める（彼は最善を尽くして観察する）。そうではあっても彼が、勇気があり目的を持たない一人の好ましい人物の姿を思い描くことについては笑い出さずにはいられない。

こちらには恐れを知る人間。好奇心に富む人間、行動する人間、注意深い人間（創造的人間！）。あちらには堂々たる他者。信仰深い人間、即物的人間、明朗な人間、略奪を好む人間。彼によると後者の（目的を持たない？）制圧者が、指揮権を持つ。熱に浮かされたラーテナウ（賛美者たちの呼び名では「監査役ラーテナウ」）は金髪貴族の祖先に心からの愛を捧げる。森からはい出てきて、陽気で真面目、そして（恐れを知る人間すなわち）知的住人を叩きのめした連中。ラーテナウは彼らの特徴である気高い純粋性とみずみずしい金髪を目の当たりにして心を動かされ、これを称揚す

る。ゴビノー、チェンバレン、フィリップ・オイレンブルクの後塵を拝する人間。あまたの人種差別作家の面々。連中としては自身の人種を称えただけのことだ。

金髪と長い頭骸はラーテナウのお追従である。私はこれにまつわる自己の利得については権利放棄する。というのも私はこれらの条件を満たしているから（これだと、ビスマルクは成功したスラブ人ということになる。ルーベニーツはライブニッツに、そしてニースキーはニーチェに）。いずれにせよ恐れを知る人間、すなわち文化創造者（「劣るタイプ」の人間）は労働することにより、知的人間に不可欠な「忍耐という傷痕」を得た。この劣るタイプの人間はせいぜいのところ創意に富み、困いの中で暮らし、堂々たる暴力手段に対抗するために下僕が専らとする説得の手段を使った。このタイプの人間は哲学で言う「超越」を持っていなかった。（私ならそうは考えない。暗い部屋を、あるいは死体を怖いと感じるなら、「超越」がないとは言えない、と私は思う。）

これに反して（最敬礼が必要！）恐れを知らぬ旧来の貴族の純粋な性質は、一切の目的と無縁である。いわく、貴族は「劣るタイプの、被抑圧者」によって作られた文明に対して「男らしく」戦った。旧来の綱領が言ってきたことは「機械化に反対する無意識の意志」という決まり文句であった。（私に言わせると、その言葉は時に所有意志を言い表すものである。）全くのところ、今日の機械化は目的性の上に打ち立てられている。そしてこの目的性は男らしい性質や純粋で恐れを知らぬ性質とは相容れないのである。すでに以前ラーテナウは（実際に彼に備わっていた心理学的才能を恥じて）曲がった鼻に関する滑稽な、逆推論から求めた理論を吹聴した。これには涙がでるほど笑わされてしまった。今また彼はあらためて（学者然とした態度で）預言者か童話の白蛇のことを語っているわけだ。

彼は物事の底深くを見るのではなく、コーヒーを入れたあとの残り滓の底を占い師がするように覗き込んでいるにすぎない。（好事家の人種論に従うと、ベートーベン はモンゴル人。かくの如し！）

我々の誰もが承知していることであるが、今日の発展へのゲルマン人の影響は絶大であり素晴らしいものであった。しかしながら我々は、諸民族の血による協力作業をも見て取っている。生理学的な新しい血と古びた血との共同作業。西暦3012年には最後のゲルマン人が煮詰まった文化の頂点に行き着き、次は黒人の出番となる（森から出てくる）。彼らは永劫の怠惰により生理的には澆刺としており—今日ですら身体的にはプロイセンの下士官よりも強健なのである。

ラーテナウは（「専門技能」という触れ込みで）オペラの知識をひけらかす。美しい階級への奉仕として。彼らの祖先たちがソクラテスやアルキビアデスの時代に人々を犠牲にしたことは、恐れを知らないことの特徴的目印だったと言うのであろうか？—敬虔なる彼らは、手足を縛られている人々を空中に放り投げ、落ちてくる彼らを3本の槍で受けるということをしていた。（注、彼らははるか時代が下っても、同じことをしていた。）

超地上的な存在へと向けられた純粋なるこれら貴族たちの深みのある質素さと明朗な真剣さを歌う産業牧歌詩人の静かな歓喜が想像できる。こういう文章（ラーテナウによる）もある「ゲルマン人の自意識、そして自主独立の感情、そして支配者精神は我々へと伝承され、ゲルマンの名誉欲と虚栄体質は想像することもできない。」ティ

ーア・ガルテンの息子に逆らうようなことは、タキトゥスは書いていない。相手への礼儀感覚。残念ながら、かの貴族の歴史がまさに王侯たちの様々な売買行為と非愛国主義的な志操により開始されていることについては言及がなされていない（これに対してアルミニウスについてはその素晴らしさが是非とも強調されねばならなかった）。それからラツィウムの進撃は最も汚い裏切りとして、いの一冊に書くこともできたであろうが、これへの言及がないのも残念である。

貴族による…、いや、正確には一部の階級による厳格な管理監督は例えば興隆を遅らせた—というのも、劣る人々（文化創造者）は二方面で戦うことを強いられたから。

「主人」と「食客」の二つの概念の紛らわしい色彩変化から生じる新しい風についても何らの注意も払われていない。

詳細に移る前に一息入れよう。

ラーテナウはドイツ人の貴族を賛美する意図の下に、人間を二タイプに分類する。ケルはラーテナウの論はただシラー、ハイネの分類思想の焼き直しに過ぎないこと、さらにラーテナウは劇場で見た英雄ジークフリートを想い、その論を展開していると述べ、ラーテナウの論の不十分さを言う。論理の組み立ての粗さが目に余る、とケルは言うのである。

ケルのここでの説明によると、ラーテナウは二種類の人間のうちの「劣る人間たち」が持つ目的意識が、現代文明すなわち「機械化した文明」を生み出したこと、それはしかしながら決定的な欠陥を併せ持っており、ラーテナウはこれを嘆き、その克服について訴えようとしている。

ケルは、タキトゥスの記述は割り引いて読まねばならないと付け加えることを忘れない。ケルの解説の先に耳を傾けよう。

### III.

古い文章が言うところによると、人種交雑は人種の個別化よりも豊かな実りをもたらす。（特にロンブローゾの説。）ラーテナウはこのことを意識する—その意識は誤っている。彼は説明する「高級文化が授けられる国民とは、二層で形成され、かつ戦闘的な貴族によって支配された国民に限られる。彼が言及するのを忘れていることがある。ヴァンダル族はアフリカの地で、他者によってなされた文化労働について、それほど多くを目の当たりにすることはなかったわけだが、なぜ彼らとしては何ひとつ為しえなかったのか、についてである。彼らは大挙してその地に住まった。つまりは二層。そして戦闘的貴族が支配したわけである。さてラーテナウはなるほど、「その条件のもとでは必ず…、というわけではなく、単に…、つまりそのような条件を欠いた場合には…云々」。よろしい。しかし、まだ間違っている。世界の機械化（文化、大都市、現代企業）は、二階層性と貴族階級の戦士による支配体制とにより実現したそうである。この通りだろうか？ 彼は言及することを忘れている。すなわち最も強力なドイツの機械化の中心地の数々は、決して「二層」ではなく、少なくとも三層から成っている。というのも、スラブ人はすでにモンゴル人の血と混ざっており、ゲルマン人もモンゴル人並びにフィンランド人の血と混ざっている—従って少なくとも三層。ラーテナウは言わない、単に「二層の」人々、つまり南ドイツは我々よりも遙か先んじて隠居生活に入っていることを、それに反してスラブ人が新鮮な血を提供し

た、それゆえに三層が存在しているところで（もちろん三層より多層なわけだが）最も強力な機械化の中心点の数々が生じた、と。

彼が話題にしている「世界の機械化」は過去と比較してただ程度の違いに過ぎないことは火を見るより明らかである。あたかも王ラムセスの兵舎がすでに世界の機械化ではなかったかの如くのである。彼は古代アフリカのカルタゴ人の集団埋葬を知っているだろうか。葬られた全員が同じ小さな（工場で作られた）ランプをもらっていた。程度について今日と異なる。

ケルはラーテナウの論に正面から挑みかかり、ラーテナウを説得しようとしている。しかしながら、ここでのケルの論理の展開は丁寧かつ明快である。相手を論破し、打ち倒そうといった調子ではない。

このとき1910年代、第一次大戦前、人種論がいわばむき出しの形で、無防備に、素朴に議論されている。ケルの解説は続く。

#### IV.

いずれにせよ、これらの諸力が存在しなかったならば不可能であったことが、長々と誉めそやされた後、螺旋状の論理に亀裂が生じる（揺れ動く論理）。

ラーテナウは言う。最高の進歩を遂げた段階には、すなわち世界の巨大な機械化には「脱ゲルマン化」が内包されている。確かにそうだ、しかしなぜ？ 彼の思考の脈絡は、私の感じではおよそ以下のように想像できる。

今や流行となったことであるが、あらゆる著者が文化考察を行い、自分の心は「絶望している」との一章を記す。マウトナーが、言語について多くのことを（ついでながら、間違いを）述べているが、本物とは見えない熱情を込めて絶望という一節を挿入している。彼は（発言によると）完全に絶望している。ワルター・ラーテナウの側では、陰鬱さが巧みな構成により噴出したある箇所似たようなことを言っている。なぜ、と彼は嘆く。こんなにも余計な遊び道具が、流行の品々があるのか。世の中はどこへ向かうのか。彼以前の、もっと下手な多くの書き手がすでに嘆いてきた。この状況にあっては、金髪に宿る精神はもはや何の役にも立ち得ない。

彼は続けて問うこともできたであろう。なぜこんなにも多くの余計な泉が湧き出するのか、こんなにも多くの余計な坂道が、多くのイチゴが、こんなにも多くの余計な花が、途方もなく多くの雄牛が？ 落ち着きのない電気の球、立ち並ぶブルーネヴァルトの邸宅、フライエンヴァルデの瀟洒な宮殿、こうしたものに彼は悲憤の涙を流さねばならない—彼が論理を一貫させるならば。人に当てはめて考えてみよう。世界の機械化を世間に向けて嘆く者は、（論理を一貫させるならば）それを阻止するべきだ—工業経営者ならばこれを密かに成し遂げることができるではないか。

ラーテナウは「魂」の出番がないことを寂しく思う。あたかも操縦士がさほど古くはなかった飛行機を懐かしむ時のように。

私がこの不完全さを知覚しないだろうか？ この不完全さは痛みを感じさせないだろうか？ 私でもそうしたことは感じる。しかし、その不完全さがひとたび突き止められ、その修正不可能性、と言うよりは遅々たる変化の実態が認識された後、その後ラーテナウはやはり、その次の問題点についてただ嘆くのみである—そして個々

の問題点は早々とお仕舞いにされてしまう。大胆で、あわれで、愛すべき皆さん。それから君たち、哀れな人間たちの間を駆け抜ける君たち、心と目を持つ優美な魔法の動物たち。私は喜んで君たちの（でたらめ、と私には分っているが）驚異…私はその驚異に千の千倍の年月でもお供をしよう。私は昔の素朴なアフリカ・カフィル人の高貴と称される時代に生きたいと思ったことはない—もっとも私には分っているのだが、今日私は似たような（同じと言うわけではないが）時代に生きていることが。

思想は美しい、その場合に頭の中で考え出されたことだけではなく、なぜ人生が美しくてはいけないのか。最後まで生きた人生だけでなく、最後に生きた人生についても。

私は来た。どこからか分らない。私は行く。どこへ向かっているのか分らない。なぜ私がこのように陽気なのか？

ケルのここでの解説からすると、ラーテナウは幻滅しているようだ。機械化した現代文明の中で、本来的なゲルマン貴族の精神と「魂」が消えて無くなってしまったことへの絶望感をラーテナウは抱いていたのであった。これに対してケルは言う、紛れも無く現代の一員である自分は何ら絶望とは程遠い気分、朗らかに毎日を過ごしている、と。

## V.

この男の性格の核心には何が存在するのか？ こうした見解の抛って来たところは？ 中心を成すものはおそらく少なからず動揺する柔らかな心…しかし決心を付けようと心に期している。確たる知識と無知との混合。逆立ち、あるいはまやかしと真剣な努力とが共同作業をしている。そして自分にとって疑わしいものは取り上げる必要はない、との彼の考え。本件は複雑であり、海面下の事例である。善に向かうあらゆる資質を備えた人間。どうやら無意識のところでは他者への余りに多くの尊敬の念…そして、やはり大いなる自意識。

「私はすれっからしじゃない」と娘さんが言うのを耳にしたことがある。これについてすら彼は触発される…。しかしながら彼は要するに余りにも高貴で、内省的な性質なので、ありきたりの考え方など到底出来ないのである。高く積み上げる粘り強い思考作業。中核のところが高貴。それから飛躍、亀裂。ワルター・ラーテナウの亀裂は哲学者でありながら表面から離れられないところ。彼は両面を持つと考える、思考する人間と支配する人間。

あたかも、彼は（実験的に）自分の種族に対して非難される欠点を、つまり畏敬の念の欠如をあらかじめ回避しようとしているかの如くであり…、しかしながらこれが実現出来ないでいる、というように感じられるのである。彼は自身を憎む—これは病気のしるしである。同様にして健康のしるしでもありうる。彼は鬼火ではない。そうではなくて知恵と揺れ動く鬼火との合成から成る。彼の明晰な頭からは支離滅裂が生まれ出る。この支離滅裂は今日、愚かさではない。論理性を有する神秘家。

彼はあくせく頑張ろうとする *Il se donne du mal*—しかし効を奏する前に早々と止めてしまう。虚栄心が強く—そして非常に内面的な人間。究極の理解者。しかし人の内を思いやる心に欠ける。繊細で柔和な人間でありながら、全く不可解なことだ。彼は同じくその著書でほめかす。彼が技術者であること、第二に物理学者であること、

第三に商人であること、第四に絵画に造詣があること、第五に音楽の理解者であること、第六に生理学者であること、第七に経済学者であること、第八にさるプロイセン王立協会の基本政策立案者、第九に一般的に言うと彼は…。彼はこれを言わない。(そのままだと彼の意図は満たされない。従って彼は頑張って無理をしながら、誰でも感じ取れるよう以下のようなことをするのもかもしれない。)彼は書面で説明する。最近になってゲルハルト・ハウプトマンが彼と親称で呼び合う仲になったことが、何と献辞の形を借りて報告される。先ず「君の名前を私は記す…」。それに続けてより明確に印象付けるために「君に、ゲルハルト…」。これらすべて、いや、これら個々の点は計量可能な事柄である。

彼はこうしたことから脱却したいと考えている—そして、できない。このことを彼は憎む。

ラーテナウの特性、ラーテナウは9つの特性を持っており、そのうちの8つまでをケルはここで挙げている。9つ目は何であろうか。それはラーテナウのこの著書『時代の批評に寄せて』の献辞で明かされている、とケルは言う。その献辞の全文<sup>3)</sup>はこうである。

「ゲルハルト・ハウプトマンへ。君の名前を私はこの書の第一ページに記す。この書を世に出すことを私がためらったことを君は知っている。私には二つのことが欠けていた。有識の読者が要求する詳細さ、そして弁証法的弁論術、こうしたものに私は関心を払わなかった。思うにすべての明晰な思想はその額に真理または誤謬の刻印を帯びている。君を、ゲルハルト、私は常に信じてきた、ここに証明はなく、ただ素朴に。この書を感謝の印として受け取ってくれ。私がドイツ人として我々の時代の詩人に抱くべき感謝の印として、そして心からの友情の贈り物として。」

なるほどケルの指摘を受けてこの文を読むと、ラーテナウの9つ目の特性が分る。それは「ドイツ人」ということである。ラーテナウへのケルの思いは、理解は深い

## VI.

彼の貴族神祕説がどこに由来するものなのか、定かではない。ここでは商人の職業の何かが、すべての商人のそれではないが、影響している。経済的に上昇する人々のものの考え方の何かが。そうした人々の没頭を彼は日々知っているわけである。それらから受ける印象を一息で吹き飛ばそうという抵抗心を彼は持っていない。将来の楽しみとしてクリスチャンのゲルマン貴族との交際を買う大金持ちを彼は見てきた。主人ピンクス、その奥方ピンカ、その娘ピンケの屋敷に集まってくるそうした貴族ゲルマンは時として、他の人々よりも幸福である（もはや彼らは客として生きているわけではないという理由から…。やはり客として生きているわけであるが。）そして主人たちは（夜会に限っての主人たち！）この価値の劣る幸運児たちに、自分たちの太鼓腹を二つに折って平身低頭するのがお好きなのである。反抗して、同じ境遇の幸せを自ら勝ち取ることの代わりに。

この視覚形式の何かがラーテナウの間違いに影響した。その際に彼は、賞賛に値する大人物の息子、完全に自主独立を自覚している男であるが—、つまり彼ワルターは真真正直な人間であるために必要なすべてを有しているのである。しかしながらこのグループの中の誰かが自分の娘のために一人の外交官の男をお金で買うとき、そのこ

とは彼の無意識に影響するのである。彼は価値の認識者から価格の判定人に成り下がるのである。

彼の貴族ゲルマン神話がワシントンの外交官ポストの周りを回転していると思うならば、それは間違いである。あまりに矮小化した考えである。(あまりにはっきりと見すぎている。) その発生についての同じく間違った見解は、他の人は何者かになろうとすれば、洗礼を受けるのだが、ラーテナウ家には決まりがあり、それがために許されない。そこで洗礼の代わりに代替品、貴族と血の崇拜。他の人々は、フランスで言うところの sans la foi「信仰心がない」場合であっても信仰を告白する。でも信仰を告白しないで信仰があるとはどういうことか。この考えも外的外れであろう。余りに単純化しすぎている。

私が思うに、ここにいるのは防御することに生まれついていない人間。この男が自分の平和を作ることのできる公式を見つける。

ラーテナウが賛美して止まないゲルマン貴族と、そしてこれに擦り寄るユダヤの金満家、その決して美しくはない姿をケルは容赦ない筆で描いている。

#### VII.

彼には何か後ろ盾になる保障がない……心のことではなく、抵抗のことで。彼は明日にでも全く安っぽい行動を取るかもしれない(すでに取りついている) —そして私は彼が死ぬ前に何か霧に包まれたようなことをなすであろうことは、信じられることだと思う。

—「あなたは国民自由党の議員になるおつもりなのでしょう？」

—「閣下、それが閣下の御意志でありますならば、そのようにいたしたく存じます」

こうした会話は考えられることだ。いずれにせよ彼は五つの職業の傍ら数々の著作(もちろん疑わしいところの多い)を著した。彼はただ単に「パパのような大きな容量」を持っているだけではない。彼はせっせと働く。(その一方で若きテュッセンは、森からはい出てきて、専ら恐れを知らず無目的の人間だった。) ラーテナウはまた、述べてきた一点を別にして、例えば世襲権の制限を自明の事と考える態度において、そしてその他何百もの考え方において、進歩の、広範囲に及ぶ、理解力に富んだ精神を示す。

この件は難しい。

ラーテナウを咎めるケルの筆は、その山場を過ぎたようだ。ラーテナウの人間的な弱さ、胸の内苦しさを察しながら、ケルはラーテナウの長所、その大いなる可能性への期待を述べる。

ワルターよ、フリッツ・テュッセンは同じく大企業家の長男で、しかも「ゲルマン人」だが、あなたの方が優れている。この点をなぜ分ろうとしないのか、とケルはラーテナウに呼びかけている。

ラーテナウは職業を5つ持つ男であるとの指摘は、「特性を持つ男」の描写として興味深い。

#### VIII.

ワルター・ラーテナウは彼の友人ハルデンから直接的ではないが影響を受けた。し

かしながらラーテナウはある時この人物がある事を心の中だけで思う代わりに、ある決心をはっきりと言葉にして表明し、そのことが弱者に大きく影響したことを知った。この友人は（ラーテナウはこの男に時折、カール・フルステンベルクの古い棒を経由してあぶく銭を得させてやっていたのだが、この男はといえば、私の知る限りで、ラーテナウのことを、自動ピアノなら上手に演奏できる男と吹聴してまわった）—この友人、お化粧好きの男は、自分の書くすべての週間記事を冷酷な商人の機械のような正確さをもって、イディッシュの響きを付して「ドイツよ、ドイツ、世界に冠たるドイツ…」で締めくくったのであった…そしてこの男よりはるかに高潔なラーテナウは、ほんの時折ではあったが、自分の意志に基づく行動を取ったのだった。事の全体はほかして記さざるをえない。この件に関しては、目を射るようなどぎつい色を帯びた数知れぬ事実がまとわりついている。

作家としてのラーテナウを支えたのがマクシミリアン・ハルデンである。ハルデンの雑誌「未来 Die Zukunft」にラーテナウが1897年、現代ユダヤ人を貶める内容の論考「聞け、イスラエル」を発表して以来の関係である。

客観的スタイルをとった自己否定とも言うるラーテナウの反ユダヤの考えは、ハルデンによって育まれたとケルは見ている。最後の章を読もう。

## IX.

ラーテナウは迷い、そして努力を続ける。彼の心の奥の奥には善が潜む。彼は少なからぬ点で人々を前進させた。私は彼の人生の日々の夕方に、彼を祝福するだろう。それ以前にはしない。

彼の複雑な行動の中には危険と希望が潜んでいる。私は彼の像を描いた。彼がこの時代と同じく動揺し、同じく堅固な息子であるから。この時代の虚弱さと、この時代の偉大さの息吹を備えているから。

同じく私は彼が、40歳半ば、交差点に差し掛かっているのを見るから。片方の木製の道しるべは真っ白な靄への道を示し、他方の道しるべは（こちらに行くべきなのだ）新しい朝の空気への道を示す。

ラーテナウへの危険の警告が、このケルのラーテナウ論の主旨であることが鮮明にされる。

このケルのエッセイは2011年の現在に至るまでまさに百年、色あせることのない好エッセイと言ってよからう。このエッセイが書かれたのは1912年、第一次大戦前であることは先に述べた。それから23年を経てこのエッセイはケルの、人生最後の著作に再録される<sup>4)</sup>。1935年ケルがパリで亡命生活を送っていた時期のことである。再録されたテキストとここに見たオリジナルのテキストとでは若干の相違がある。ベルリンにあって劇評家としてスターの地位を確立してゆく時代に書いたエッセイである。ヒトラーから命からがら逃れて、今や一家してその日のパンに事欠く境遇に落ちた身にとって、現状にそぐわなくなった箇所や、同じく状況の変化に照らしその時点で誤解を生じる可能性のある文などの削除はやむをえない事だと言えよう。もとより両方の文章の間に、本旨に影響を持つ変更はなされていない<sup>5)</sup>。

1935年にケルが著した本はこの1912年のエッセイを核に据えて書かれたものであり、題名について言うと『ワルター・ラーテナウ ある友人の思い出』と、かつてのエッセイに新たに副

題が添えられたところだけが変わっている。著作に採られたエッセイには新しい章が一つ追加されている。読んでみよう。

X.

これが「パーン」に書いた文章である…ここには何があったのか。「私は彼の人生の日々の夕方に、彼を祝福するだろう。それ以前にはしない。」

二つながら事実となった。

…我々の関係に休止の時が生じた。その後戦争が起きた。ラーテナウの根本的変化の最も深遠な原因。

苦しみは人間を高貴にするとしたのはニーチェではなかったか？ここでは、この方がはるかに価値があるが、見知らぬ世界の苦しみ人が人を高貴にした。

しかしながら彼の中にあらかじめ高貴なるものがあったからこそ、それがまさに光を放って姿を現すことができたのである。彼の時折の混乱のがらくたは永遠に存続する。いやそれ以前に彼はもう一度逆に進む。父親の葬儀の時である。

著書の方ではこのあと、ラーテナウの父が亡くなったおりのラーテナウの「弱い」振る舞いについて、ケルの同趣旨の論が続けられる。

### Ⅲ ムージルのラーテナウ批評「超心理学への注釈」

ラーテナウはケルから厳しい批判を受けた『時代の批評に寄せて』に続けて翌1913年、『精神の力学に寄せて、または魂の王国について』<sup>6)</sup>を発表した。ムージルはこの本について「ディー・ノイエ・レントシャウ」誌にエッセイ「超心理学への注釈」<sup>7)</sup>を発表した。1914年4月のことである。

ムージルはまず論点の所在について一般的な紹介をする。「今日の唯心論哲学が好む理念」によると、「良質の現世的作品は、何らかの形で我々の彼岸的存在を形成している」<sup>8)</sup>ということであるが、その非論理性と無意味さは滑稽としか形容できない。オイケン、ベルグソンにすらこうした論調が認められる、とムージルは始める。感覚を超えるものを知覚し、認識するにはどのようにすればよいのか、ムージルはこのことを問うて、論を起こしている。

ラーテナウいわく、とムージルは説明する、「正しい人間は—ラーテナウいわく魂の溢れる人間—愛、断念、理念、直観、大胆な真理を好み、その性格は誠実、寛大にして独立独歩であり、その振る舞いは確実で、晴れやかに落ち着き断固としている、賢明というよりは強靱で、経験豊かというよりは自己をわきまえていて、生の晴れやかな自由さ、超越的な高揚への傾向、直観的な敬虔さを身につけている」<sup>9)</sup>。

果たしてそうなのか。こうして羅列されている特性の羅列は「魂の溢れる人間」の何がしかを捉えているのだろうか。ドストエフスキー、フロベールの場合は。ショーペンハウアー、ニーチェ、ヘルダーリンの場合は。オスカー・ワイルドは。ヴェルレーヌ、ヴァン・ゴッホは。ラーテナウの言をもってしては、こうした人物たちについて何の説明にもならないことをムージルは言う。ラーテナウの根拠は古代ギリシャ人である。ならば、とムージルは反論する。ニーチェは我々に、アポロ的なものとディオニュソス的なものの区別を教えたではないか、もともとゲテですら決してアポロの人間だと言うことはできない、と。

「魂を持つ民族、彼らの精神は現象の上を漂い、『一見くったくなく無関心に、しかしこの上

ない理解を示しながら被造物に関心を寄せる』ユーモアという至高の直観形式に高められるのだ」<sup>10)</sup>とのラーテナウの言葉に、ムージルはダンテ、ゲーテ、ペートーベン、ドストエフスキーの誰が一体ユーモアを持っていたらうか、と疑問を呈し、彼らは皆ユーモアに無縁だったとムージルは断言する。

その上でムージルは言う「ラーテナウの著作には、こうした欠点を大目に見てもよい貴重なものがある」、「この著書におけるそうした(魂の、あるいは愛の)体験の描写は」素晴らしい、「これぞ、神秘主義の根本体験である」<sup>11)</sup>とムージルはラーテナウを称える。

ラーテナウが把握したものは確かにあるのだろう、しかしそれを取り出し、そして言葉にするとき、それはラーテナウが意図したものとは似ても似つかないものとなって提出されている。ムージルはラーテナウの差し出す課題の克服にこのエッセイでなお詳細な提案を行った上で、エッセイを「一我々ドイツ人は一ニーチェの偉大な試みを除いては一人間について書かれた書物を持っていない。生を体系づけ、組織化する者を持っていない、芸術的思考と学問的思考は、我々においてはまだ触れ合っていない、両者の中間領域の問題は未解決なままである」<sup>12)</sup>と結ぶ。

#### IV 結び

ムージルは1914年のラーテナウ批評を、1912年のケルのラーテナウ批評に沿った論調で書いた。そこに見られる共通の論調は、多くのそして大きな欠点の指摘と、それでもそこに一しづく光を放つ長所の指摘である。

ケルはラーテナウが人種論を展開し、自身も危うくするであろう反ユダヤ主義を表明する点を批判しつつ、ラーテナウが表明する現代への幻滅と絶望に、ラーテナウの内心の真実性を認めている。ムージルはラーテナウの論の人間理解の基礎に彼の「体験」の真実性を見ている。

ムージルとケル、この二人はラーテナウの論の粗さ、あるいはその論理的飛躍を難じる。ケルはこれ見よがしに大笑いしてみせる。ムージルは上品な論理のヴェールの陰でラーテナウの論を一蹴している。それでいて、両者はラーテナウを救い出すことに力を費やしている。

ムージルとケルの論は似ている。似てはいるが同じではない。ケルはラーテナウが自分と同じ人間になるように求めている。ムージルはラーテナウのその著に込めた意図が有効なものとなる手立てを展望している。その場合にムージルは、ラーテナウにはそれが実現できないことを認識している。誰も解決できない課題だからである。誰かその課題を解く者がいるとすれば、それはムージル自身であることをムージルは自覚している。

ムージルは1914年1月11日ベルリン・グルーネヴァルトのラーテナウ邸でラーテナウと会った。ケルとラーテナウは邸宅街グルーネヴァルトの隣人同士である。二人の屋敷は互いにほんの目と鼻の先に位置している。二人を引き合わせた人物はケルだと想像するのは容易なことだが、その詳細は定かではない。しかしながら、ケルの雑誌「パーン」にムージルが深い関わりを持っていたこと、その雑誌でケルはラーテナウの著書に関して当代随一そして最大のエッセイを発表したこと、その論の中でラーテナウに対するハイネの影響を明確に指摘したこと、この経緯があってムージルがラーテナウのその直後の著書に関して、形式と内容の両面からケルのエッセイの続編あるいは姉妹編とも名付けうるエッセイを書いたこと、こうしたことから、やはりムージルをラーテナウに引き合わせた人物はアルフレート・ケルに違いない、と言うことができる。

注

- 1) Alfred Kerr: *Walther Rathenau*. In: *PAN*. (Herausgeber, Alfred Kerr) Berlin 1912, S. 1193-1200.
- 2) Walther Rathenau: *Zur Kritik der Zeit*. Berlin (S. Fischer) 1912. なお本論でのラーテナウからの引用は1918年刊の5巻本による。Walther Rathenau: *Gesammelte Schriften in fünf Bänden*. Berlin (S. Fischer) 1918
- 3) Walther Rathenau: *Zur Kritik der Zeit*. S. 9
- 4) Alfred Kerr: *Walther Rathenau*. Amsterdam (Querido) 1935, S. 139-154
- 5) 両テキストの異同はおおよそ以下の通りである。
  - I. 「しかし彼はこの地であっても」以下の文が削除
  - II. 「演劇、ジークフリート」は括弧に括られている  
「熱に浮かされたラーテナウ」に続く括弧の文（賛美者たちの呼び名では「監査役ラーテナウ」）が削除  
最後の文「詳細に移る前に一息入れよう」が削除
  - III. 「(特にロンブローゾの説。)」が削除  
「単に『二層の』人々、つまり南ドイツは我々よりも遥か先んじて隠居生活に入っていることを、それに反して」が削除
  - IV. 最後から二つ目の段落「思想は美しい、その場合に頭で考え出されたことだけでなく、なぜ人生が美しくてはいけないのか。最後まで生きた人生だけでなく、最後に生きた人生についても」が削除
  - VII. 「『あなたは国民自由党の議員になるおつもりなのでしょうか?』……。こうした会話は考えられることだ」の部分がすべて削除
  - VIII. 「カール・フルステンベルクの占い棒」が「株取引」に入れ替わっている
  - IX. 最後の段落が削除
- 6) Walther Rathenau: *Zur Mechanik des Geistes oder vom Reich der Seele*. Berlin (S. Fischer) 1913
- 7) Robert Musil: *Anmerkung zu einer Metapsychik*. In: *Die Neue Rundschau*. Jg. 25, H. 4, 1914, S. 556-560. なお本論のムージルからの引用は以下の版による。Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg 1978. このムージルのエッセイには邦訳がある。北島玲子訳「超心理学への注釈」(『ムージル・エッセンス、魂と厳密性』中央大学出版部)
- 8) Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. S. 1015
- 9) Ebd., S. 1016
- 10) Ebd., S. 1016f.
- 11) Ebd., S. 1017
- 12) Ebd., S. 1019